ころもがへ

高濱虚子

衣を更へるといふと綿入を袷に着更へる事である。俳句の季題に古くからある。冬の間重く厚ぼつたく着重ねて居つたのが、春になつてやゝ暖かになり下着を~~裸~~脱ぎ羽織を取つて綿入一枚のやゝ身軽るはなつたけれどもまだ冴返へる寒さに時には羽織を取出して着ねばならぬし、身に重い感じのする事はやはり冬

同様であつた。それがいよ〱夏といふ~~各~~名のつく時候になると、遂る綿入を~~裸~~脱ぎ棄てゝ袷になる。綿入を着てゐると、汗ばむ様な心持がして、ぜひとも袷に着更へねばならなくなつて来る。そうして袷を着更へると、いかにも軽く、すが〱しい心持がする。俳句で衣更の句を詠ずるのは大概その間の趣を言つたものである。

蕪村句集一巻を取出して見るとその衣更の句が非常に澤山ある。先づ